

災害時相互支援協定締結団体による福島県被災地の現状視察報告

一般社団法人 愛知県環境測定分析協会
災害緊急時対応委員会

1. はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災から12年を迎えました。愛環協では震災発生から4か月後の2011年7月に「東日本大震災現地視察」、1年2か月後の2012年5月に「第二次東日本大震災現地視察」を行い、宮城県内の計量証明事業所の被災状況やその後の地震対策を踏まえた復旧や運営再開の状況を視察し、災害に対する備えの大切さとラボの地震対策の実例のレポートを行い各会員のBCP対応の一助になりました。

今回、災害時相互支援協定を締結している一般社団法人福島県環境測定・放射能計測協会様のご厚意により、震災から11年（視察当時）が経過してもなお町内の大部分が「帰還困難区域」となっている福島県浪江町、双葉町の現状の視察を行ったので報告します。なお、本稿記載の情報は視察時点での見聞をもとにしたものであることにご留意をお願いいたします。

2. 現地視察行程および参加者

福島県被災地の現状視察は、2022年11月18日から11月19日の行程で、浪江町の「道の駅なみえ」を訪問し、「東日本大震災・原子力災害伝承館」の館内見学および周辺被災地でのフィールドワーク、参加者による意見交換会を行いました（表1、図1）。

視察参加者は災害時広域支援協定締結6団体のほか2団体および2個人で計34名が参加しました（表2）。愛環協からは大野会長、林副会長、大場理事、林災害緊急時対応委員長の4名が参加しました。

表1 視察行程

日 程	行 程
2022年 11月18日（金）	10：00 福島駅 集合
	12：00 浪江町 道の駅なみえ
	13：30 東日本大震災・原子力災害伝承館 ・伝承館内見学 ・周辺被災地でのフィールドワーク
	18：30 土湯温泉 山水荘
	19：00 意見交換会
11月19日（土）	10：00 福島駅 解散



地図出典)県全図：Map-It マップイット地図素材サイト、2町拡大図：国土地理院地形図に加筆

図1 視察行程の位置関係

表2 視察参加団体（あいうえお順）

参加団体（計8団体）	参加者数
一般社団法人 愛知県環境測定分析協会	4名
大阪環境測定分析事業者協会	3名
一般社団法人 神奈川県環境計量協議会	4名
一般社団法人 埼玉県環境計量協議会	8名
千葉県環境計量協会	3名
東京都環境計量協議会	2名
一般社団法人 福岡県環境計量証明事業協会	1名
一般社団法人 福島県環境測定・放射能計測協会	7名
団体外	2名
計	34名

3. 視察状況

3.1 道の駅なみえ

「道の駅なみえ」は福島県浜通り地方を南北に縦断する国道6号線と福島県を東西に横断する県道459号線が交差する場所に位置しています。当地区は2017年(平成29年)3月の避難指示解除を受けており、浪江町役場をはじめ浪江消防署、浪江診療所など生活に欠かせない重要な施設が集まっていて、それらの施設とともに「道の駅なみえ」は復興の拠点となっています。特に復興の途中にある浪江町にとっては、人々のランドマークとして、また町の復興のシンボルとして買い物や食事、集会などができる大切な施設でもあります。これに加えて復興に向けた浪江町の新たなチャレンジを支える場所ともなっていて、太陽光のほか、町内で稼働中の世界最大級の水素製造拠点「福島水素エネルギー研究フィールド(FH2R)」で製造された水素を用いた発電によって得た再生可能エネルギーを照明や空調などに活用しており、スマートコミュニティの実現に向けてその拠点としての役割を担っています。

私たち一行は、福島駅を出発後まず初めにこの「道の駅なみえ」を訪問しました(写真1)。訪問では施設の見学や物産市を見学した後道の駅で昼食をとり、福島県内の日本酒の試飲ができるブースを訪れました。参加者の多くは浪江町の名産である「なみえ焼きそば」や「釜揚げシラス丼」に舌鼓をうち、いざ日本酒の試飲ブースへ(写真2)。試飲ブースは500円で5枚のコインを受け取り、コイン1枚で1種類の地酒の試飲ができるシステムとなっていました。参加者はどれを試飲しても満足気で、さらにコインの追加をするなど好評でした。それもそのはずで、あとで伺った話では福島県の地酒はやや辛口のお酒が多く、日本酒好きはもとよりあまり日本酒を飲めない方でも口当たりがよく飲みやすいお酒が多いとのことでした。



写真1 道の駅なみえ



写真2 福島県地酒の試飲ブース

3.2 東日本大震災・原子力災害伝承館

道の駅なみえを後にして次に向かったのは「東日本大震災・原子力災害伝承館」です。この伝承館は2020年9月の開館で、福島が復興に向き合ってきた「証」を資料として収集、保存、展示することを目的とした施設です。展示や語り部、研修、調査・研究を通じて、未曾有の複合災害について福島で何が起き、どう向き合ってきたかを伝え、防災・減災に向けた教訓

を発信する施設となっています。(写真3) また、東日本大震災・原子力災害伝承館は福島第一原発から直線距離で4 kmの場所にあり、屋上からは福島第一原発の煙突を望むことができます(写真4)。



写真3 東日本大震災・原子力災害伝承館



写真4 伝承館屋上より福島第一原発を望む
(○：福島第一原発の煙突、直線距離で4 km)

館内に入るとまず初めに白い壁面に囲まれた吹き抜けの部屋に案内されました。そして係員からの館内の案内があった後、震災から復興までのストーリーが映像で壁面一杯に映し出され、参加者はみな身が引き締まるような感覚を覚えながら館内展示へと進みました(写真5、6)



写真5 入館時のガイダンスを聞く参加者



写真6 記憶の回廊を巡り展示室へ

館内には地震や津波による被害を示す展示品(写真7、8)のほか原子力災害後の避難指示による町民の苦労や放射能汚染が復興の大きな妨げになっていることなどについても展示説明がありました(写真9)。また、浪江町、双葉町は福島第一原子力発電所の誘致前には農業以外の産業がなく、冬の農閑期には多くの町民が遠方への出稼ぎを行っていましたが、誘致後は産業の活性化が進み農閑期の出稼ぎの必要がなくなるなど、原子力産業を基に町が発展できたとのことでした。双葉駅につながるメインロードに掲げられていた「原子力 明るい 未来の

エネルギー」と書かれたゲート看板の写真（写真10）は、町が原子力産業に支えられ発展を遂げたかつての姿を強烈に物語っていますが、今となってはなんともはがゆく複雑な気持ちにさせられる展示でした。また、東日本大震災による地震、津波被害、そしてその直後から今もなお続く放射能汚染による復興にむけての大きな障害を目の当たりにし、おのずと参加者の会話も少なくなっていました。



写真7 津波により変形したポスト



写真8 津波により変形した車両



写真9 放射能汚染が震災復興の妨げに



写真10 原子力産業に支えられた町の発展

3.3 フィールドワーク

フィールドワークは東日本大震災・原子力災害伝承館の見学の後、現地の専門ガイドさんにバスに同乗していただき（写真11）、浪江町の避難指示解除区域や双葉町の特定復興再生拠点区域を中心に回り解説をしていただきました。



写真11 フィールドワークのガイドさん

(1)現在の町並み ～枯れ木や倒壊建物～

双葉町の旧市街地は今もなお帰還困難区域に指定されており、一部では倒壊している建物もありますが災害発生時から時間が止まったかのような街並みがつづきます（写真12、13）。また郊外に出ても街の風景は変わらず、すぐにでも住めそうな住宅がいくつも立ち並んでいました。ガイドさんの話では帰還困難区域に現存する住宅ではタヌキやハクビシンなどの野生動物の住処となっていることも多く、コタツにタヌキの一家が巣を作っていたこともあるとのことでした。さらに、すこし海岸に近づくと枯れたまま立っている木が散見されましたが、これらは津波による塩害によって立ち枯れしたものであるとのことで11年が経過してもなお人の生活環境だけでなく自然環境にも影響が残っている様子がうかがえました（写真14）。

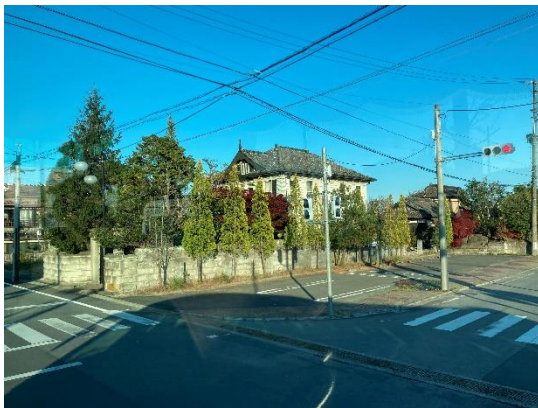


写真12 双葉町市街地内の様子



写真13 双葉町市街地内の様子



写真14 津波塩害による樹木の立ち枯れ

(2) 請戸小学校の奇跡

「請戸小学校の奇跡」をご存じでしょうか？

東日本大震災発生時に海岸近くに立地する請戸小学校が誰一人の死者を出すことなく地震発生から津波襲来までの40分間という短い時間で避難ができたというものです。私たち一行は「請戸小学校の奇跡」を少しでも体感すべく、請戸小学校をバス車内から見学し、当時児童たちが最初に避難した場所「大平山霊園」でバスを降りました。大平山霊園は太平洋、海岸線、請戸小学校を一望できる高台にあります（写真15、16）。

大平山霊園の現状での平地との比高は目測で十数メートルほど（写真17）ですが、津波襲来時には平地部分の道路を車で避難した結果、渋滞で身動きが取れなくなった方の多くは津波にのまれ亡くなったとのこと。津波発生当時は今のように法面整備はされておらず草木の生えた状態であったとは思いますが、ほんの数分から数十分あればこの程度の斜面ならなんとか登ることはできたのではないかと感じ、非常時の咄嗟の判断の難しさを考えさせられました。

さらには、請戸小学校の避難の時系列とその時に発生した事象を表3に整理しました。この中にはいくつかの奇跡のポイントがあります。入山口への近道を選択するという咄嗟の判断は大きな成功要因ではありますが、それにも増して平常時からの校外避難という選択肢の準備と決断、避難開始を遅らせないために児童の引き渡しを行わないというルール of 徹底が忠実に実行されたことが「請戸小学校の奇跡」の始まりであったことを感じました。



写真15 大平山霊園から請戸小学校を望む



写真16 請戸小学校の全景(車窓から)



写真17 生死を分けた高さ

表3 請戸小学校の避難の選択と決断

① 14:46 地震発生

★第一原則は2階への避難であったが地震の大きさから想定を超える津波であると判断し、第二原則である大平山への校外避難を決断。なお、2階建校舎の屋上は平型ではなく避難できないため第二原則では大平山への避難を規定していた。結果として津波は校舎2階にも達した。

② 14:54 請戸小→大平山に避難開始

★地震発生直後に保護者数名が児童の引き取りに来たが、平常時に定めた原則ではいち早く避難するため引き渡しは行わない規定となっておりそれを厳守し、即座に避難を開始した。

③ 15:35 大平山の麓に到着

★大平山の入山口への近道を知っている児童がいたため、引率教師の判断で児童が示す近道を選択し10～15分の大平山高台への到着時間短縮に成功し、その直後に大平山麓に津波が襲来した。本来のルートでは隊列の後ろの方は間に合わなかった可能性があった。

④ 16:05 大平山頂上に到着

⑤ 16:30 国道6号に到着

★天候の悪化で降雪あり。日も暮れる。

⑥ 16:40 運送業者の大型トラックに乗る

★偶然にも空荷のトラックが通りかかり全員を一斉に避難所である町民体育館に搬送できた。

⑦ 17:00 町民体育館に到着

出典：時系列は「ふるさと請戸 郷愁編」をもとに作成、★はガイドさんの話の伝聞

(3)さらなる復興に向けて

地震、津波、放射能汚染による複合災害の大きな爪痕を視察した私たち一行は、この視察の3か月前の2022年8月30日に避難指示が解除され特定復興再生拠点区域となった「双葉町まちなか再生ゾーン」に向かいました。この区域は双葉町再生の先駆的なエリアとして、公共施設や商業施設などが建設され地域の活性化を図る中心となるべく計画された区域になっています。

バスの車内からの見学とはなりましたが、2020年3月14日に9年ぶりに全線開通をした常磐線双葉駅がこのエリアの中心となっており、真新しい双葉駅駅舎（写真18）と駅ロータリーを挟んでこれもまた真新しい双葉町役場（写真19）を見ることができました。ただし役場の職員は現時点では居住する場所の整備ができていないため、現在はいわき市などから1時間半の時間をかけ通勤しておられるとのことでした。



写真18 常磐線双葉駅の駅舎（車窓より） 写真19 双葉町役場（車窓より）

2022年8月30日の避難指示解除のニュースは全国的に報道されており私も知ってはいませんが、

- ・解除対象は双葉町の面積の15%にすぎないこと
- ・町内85%を占める帰還困難区域の解除の見通しは立たっていないこと
- ・震災前の人口は7000人であったが現在は30人であること
- ・農地での農業生産は困難で太陽光発電パネル設置など用途が限定的であること

など一口に解除といっても町としての元の姿や生活が再生されたわけではないことについては当地を訪れガイドさんからの解説を聞き、自分の目で見なければ実感できない現実でした。

そんな中でも、バスの車窓からは時折、空き家に描かれたウォールアートが目飛び込んできます（写真20）。これは「FUTABA Art District」という企画として行われているもので、空き家にウォールアートを施し少しでも街を明るく彩ることで復興を進めたいという目的のもとに行われているとのことでした。視察で災害の爪痕を多く見てきた私たちの心も少し明るくなるとともに、復興に向けた地域の方の想いと熱意を感じ取ることもできた貴重な現状視察でした。

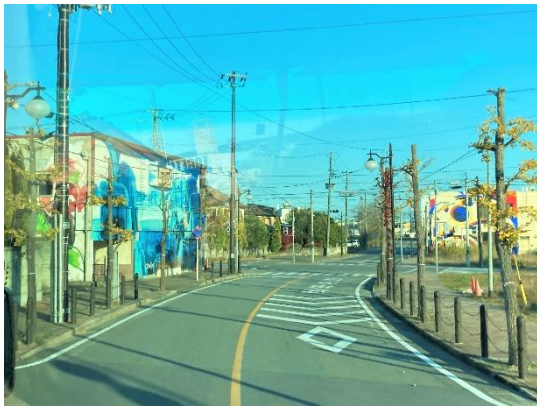


写真20 空き家の壁面アート（車窓より）

4. 意見交換会

双葉町、浪江町の視察を終えた一行は、意見交換会会場である土湯温泉山水荘に向かいました（写真21）。日中の視察に時間を使ったため会場到着は日が暮れてからとなったこともあり急いで温泉で汗を流し意見交換会を行いました。

意見交換会では一般社団法人福島県環境測定・放射能計測協会の吉元会長様よりご挨拶をいただき（写真22）、その後愛環協大野会長の乾杯で始まりました（写真23）。意見交換会では、各団体の代表から今回の視察の感想や災害協定における課題など発表を行いました。また、次年度の災害時広域支援協定の会議の開催場所についても意見交換を行った結果、次年度の開催場所は大阪となりました。意見交換会では福島の食材がふんだんに使われた料理と、おいしい地酒がならび大変有意義な意見交換会となりました。



写真21 土湯温泉 山水荘



写真22 福環協吉元会長のあいさつ



写真23 愛環協の大野会長の乾杯ご発声

5. おわりに

愛知県に住む私にとって東日本大震災、福島第一原発事故はその後の復興も含め報道で知れる範囲では情報を得ていました。特に原子力災害については外国による食品の輸入制限の解除のニュースのほか視察の直前には避難区域解除の報道が耳に入り、着実に人の暮らしが戻りつつあるのだとの認識を持っておりました。今回、東日本大震災から11年が経過した福島県双葉町と浪江町の現状を視察し、確かに部分的には復興が進んでいることを目にしましたが、報道で聞き感じた以上に問題や課題が山積していることもわかりました。そして、福島県では地震や津波といった物理的な被害だけでなくそこに目に見えない原子力災害が加わることで宮城県や岩手県のような素早い計画的な復興を困難にさせています。今後も長期にわたる帰宅困難区域の指定や汚染水や汚染土壌など中間貯蔵されている放射線汚染物の処理などについて確定的な計画がない中で処理の技術開発やスキームを組み立てながら手探りで復興が続くと知り、環境の計量や調査を行う者として身が引き締まる思いでありました。また、「請戸小学校の奇跡」では、平常時から対応を十分に計画し非常時には忠実に実行するとともに非常時であるがゆえによりベターな選択を行うといった思考と行動の大切さを肝に銘ずる視察となりました。

おわりになりますが、今回の視察を企画・運営していただきました一般社団法人福島県環境測定・放射能計測協会の吉元会長はじめ協会の皆様には心より御礼申し上げます(写真24)。そして、福島県浪江町と双葉町の地域の伝統と文化を大切にしたい新たなまちづくりがより早く確実に進んでいくことを切に祈念いたします。



写真24 東日本大震災・原子力災害伝承館の屋上で

以上